

◆リヨン風信(五十六)◆最終回

『夢じやない』

中川莉羅

今年もまた、「光の祭典」の季節がやってきた。毎年十二月八日から十二日までの四日間、リヨンは大規模なイルミネーションで彩られる。この盛大なスペクタクルを一目見ようと世界各地から人々が押し寄せる。

今年は残念ながらアランが体調を崩してしまい、リヨンはおろか地元のタラールの祭典にさえ出かけなかった。その代わり、私たちは部屋の窓辺にろうそくを飾った。ろうそくの炎はゆらゆらと揺れながら、闇をあたたく照らしてくれた。外を見ると、向かいの家の窓辺にも同じようにひかりが灯っていた。本来「光の祭典」とは聖母マリアに感謝を捧げる日で、ろうそくはそのシンボルなのだそう。華々しいショーには出かけなくても、一番大切なことを、その日私たちは行ったのだった。

今年の十一月にモアレという地域を訪れた。モアレはローヌ県に位置する小さな村で、葡萄畑の広がる美しい土地である。そこにはアランのお父様のデIMITRIと奥様のミレイユが住んでいて、私たちをご自宅に招待してくださったのだ。

ちようどボジョレーヌーヴォーの季節でもあり、試飲会にも顔を出そうということになった。

当日、デIMITRI氏が車でお迎えに来て下さった。義父は樫の樹みたいに背が高く、いかにも頼りがいがありそうな人物だ。アランと並ぶと後ろ姿だけで親子とわかるほど背格好がよく似ている。人の好きそうな水色の瞳、やや肉厚の唇、そしてよく通るあたたい声もアランにそっくりだ。車に揺られて三十分ほどすると、ご自宅に到着した。玄関前でミレイユが待っていてくれた。ミレイユは小柄で、くるくるとよく動く蜂蜜色の瞳が印象的な女性だ。黄褐色の短い髪の毛が瞳の色とよく合っている。

「まあまあ、よく来たわね。寒くない？」

「大丈夫です。今日はお招きくださり、ありがとうございます。お元気ですか？」

「ええ、元気よ。まあ、立ち話もなんだし、早速だけど行きましょうか」

というわけで私たちは一路、試飲会の会場を目指した。

そこは小学校の体育館ほどの大きさの酒蔵だった。地元を生産者の方々が特産品を売っており、何人かの客が試飲をしている。アランはどのワインを買おうかと思案している。残



念ながら私はアルコールに弱いので試飲は遠慮したが、その代わりに生産者の方々のお話を伺うことが出来た。

ボジョレーヌーヴォーは日本でも大人気で、毎年この季節になると人々が店先に駆け寄るのだと言うと、生産者の方は嬉しそうな顔をされた。フランスでは新しいワインより年代物が好まれる傾向があるが、それでもやはりボジョレーヌーヴォーの季節を心待ちにするファンは多いらしい。それはフランスの文化にとって欠かせないものであり、生産者と消費者の交流の機会でもあるという。ワインの果たす役割は、私が思うよりもずっと多層的なものなのかもしれない。

会場を後にし、再び義父の家に戻った。広々とした美しい家で、窓からは葡萄畑が見える。庭には三羽の鶏がいて、小屋の中で身を寄せ合いまどろんでいた。ちょうどお昼時だったので、ミレイユが用意してくれた食事をいただいた。オムレツ、かぼちやのムース、(男性陣には鱈のパイ包み)、ポテトグラタン。どれも繊細な味付けで、盛り付けにも工夫が凝らされていて、とても美味しかった。デザートに珈琲とティラミスをいただいた後、腹ごなしに散歩でもしようということになった。



歩いて十分ほどすると小高い丘に辿り着いた。丘の頂上には墓地があり、墓碑がところ狭しと並んでいる。菊の花の生けられた花瓶があちこちにひっくり返っていた。

「おやおや、この間の雨ですっかりやられてしまったな」  
デIMITリはそう言って花瓶を元の位置に戻した。彼は村の助役として活動しており、ミレイユもそれを援助している。そのため、公共施設の管理は彼らの仕事なのだそうだ。そう言われて見ると、歩く先々で彼らは地元の人々に呼びかけられている。

「やあ、元気？ そういえば今度の会合のことなんだけど…」  
という具合に。

「お義父様って、ずいぶん顔が広いのね」私はアランに耳打ちした。  
「まあ、親父が仕事を気に入ってるのなら、何よりだ」とアランは言った。

家に戻るころには夕暮れが近づいていた。紫色と桃色が淡く混じり合い、空気がひんやりと重たくなる。葡萄畑は闇の中に溶けゆくようとしていた。

庭を横切って家に入ろうとして、私は思わず「あ」と声を上げた。暗がりの中に猫が一匹、佇んでいた。それはふつくらとした毛並みのいい三毛猫で、日本のわが家で飼ってい



る猫とそっくりだったのだ。一瞬、猫が国境を超えて私に会いに来てくれたのかと思ったほどだった。

「ああ、うちの猫よ。クツキーって言うの」とミレイユが説明してくれた。彼女が窓を開けると、猫はひよこひよこ家の中に入ってきた。猫は胡散臭そうに私のほうをちらと見たが、関わる気はなさそうだった。

「気にしないでくれ。以前なんて、客人があつた日には居間に近寄りもしなかつたんだ。これでもだいぶ人慣れしてきたほうだよ」

デIMITリが口を添えた。私は大丈夫ですと答えた。猫の淡泊な性質には慣れているので。私はじっと猫を見た。猫はおどした瞳をして、迷惑そうに私の視線を避けた。それに関わらず、その猫の存在は日本のことを思い出させてくれた。

暗くなってきたのでそろそろお開きということになった。お二人は庭で取れた卵とワインを何本かお土産にくださつた。帰りの車の中で、私はフランスに来る前のことをぼんやりと思い出していた。

実はリヨンに留学が決まる二年ほど前から、私はしばしばフランスに旅行に来ていた。そこで過ごした時間はとても貴



重で豊かなものだったが、旅の終わりにはいつも少し寂しくなった。旅行中に出逢った人々は、まるで夢の中の登場人物のようなものだった。おそらくもう二度と会うことのない人々だと思っていた。彼らには彼らの生活が、私には日本での生活がある。仕事は忙しかったが充実していたし、私は東京での生活にそれなりに満足していた。それなのに、ふとした拍子に心の中がざわついた。このままでいいのか、と。

私は旅行をするたび、いつも「これが最後の旅になるかもしれない」と漠然と思っていた。旅行代金だって馬鹿にならないし、そんなにしょっちゅう仕事を休むわけにもいかない。いくら家族が私のわがままを受け入れてくれるとは言え、いつまでも夢を見ていちゃだめだと自分に言い聞かせていた。

ところが今、私はフランスにいる。ここで出逢った人たちは幻なんかじゃない。運転席の義父と助手席のアランの話す声が聞こえる。先ほどいただいたお土産の箱の重みを、ちゃんと膝の上を感じる。

「ねえ、莉羅、どう思う？」アランの声が私を現実の世界に引き戻す。私ははっとして「何？」と言う。

「おいおい、眠っちゃったのかと思ったよ。今年のクリスマスはグザビエの家でパーティーしないか？って言ったんだ」私はそっと微笑む。そして「いいアイデアね」と答える。



フランスでの生活は五年目を迎えた。フランスは夢の国というわけではない。情勢はますます緊迫する一方だ。それでも私は、ここで生きていることを幸せに思う。二〇二三年が暮れてゆく。どうか翌年も大切な人々が元気でいてくれますようにと願いながら筆を置くことにする。

◆リヨン風信（五十五）◆

## 明日を待つ

中川莉羅



今年の十一月は雨ばかり降っている。冷たく、暗い雨だ。私は出かけるのをあきらめ、雨に濡れた天窓から灰色の空を見上げる。影のない薄い色の雲が、目に見えないくらいの速さでゆっくりと動いている。

翌日、久々に晴れ間が見えたので散歩に出かけた。くつきりとはりつめた青い空に、銀杏の黄色が鮮やかに浮かび上がっている。まるで双子の彗星みたいに、飛行機雲がふたつ空を横切っていた。

十月十三日、フランス北部のパ・ド・カレール県アラスの高校で、教師が刺殺されるという事件が起こった。目撃者によると、犯人はアラビア語で「アッラーフ・アクバル（神は偉大なり）」と叫んでいたという。マクロン大統領はこれを「卑劣なテロ行為である」と宣言し、国内のテロ警戒水準を

最高レベルに引き上げた。またベルギーでは同月十六日銃撃事件があり、スウェーデン人二人が死亡、一人が負傷した。犯人と見られる男性は武装組織「イスラム国」に触発されたと発言している。

これらの事件がイスラエル・ハマスの紛争とつながりがあることは明白であるらしい。というのも、フランスには欧州最大のユダヤ教徒コミュニティとイスラム教徒コミュニティがあるためだ。彼の地での紛争への憤りを晴らそうとするが如く、彼らはフランス市民を、いやヨーロッパ連合すべての人々を標的にしようとしているらしい。コロナ禍でのロックダウン政策はまだ記憶に新しいが、今後はテロ対策の一環としての「ステイ・ホーム」も必要になるかもしれない、という意見が囁かれている。

そのニュースの後、アランは私に三箇条を言い渡した。曰く、「知らない人が来ても絶対にドアを開けないこと」「外出は朝の時間のみ、夜は一人で出歩かないこと」「金曜日と日曜日は外出しないこと」。

「そんな、子どもじゃないんだから大丈夫よ」と私はあきれ顔で言う。

「いいや、わかっていない。なんといっても、君は日本という安全な国から来たんだからね。痛い目を見てからじゃ遅いんだ」とアラン。

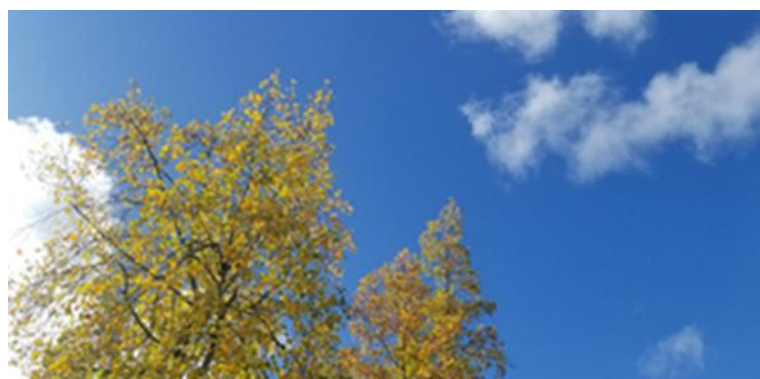
私は少ししゅんとした。

「君はまさか、『ベルサイユのばら』みたいな憧れを抱いてフランスに来たわけじゃないだろうね？」

「まさか。そんな世間知らずじゃないわよ」私は口を尖らせ

る。憧れや情熱だけでフランスにいられるほど甘くはないと、私は一度目の留学で学んだ。そうした漠然とした感情は、メディアによって創り出された「幻のフランス」に依拠するものであることも。熱病患者のうわごとのように「パリ、パリ」と呟くあの頃の自分とはもう違うのだ。

けれど私は実際のフランスの姿をどこまで知っているのだろう。政治的に緊張した今の状態は、フランス人にとってさえ予測不可能な事態であるらしい。おまけに私はビザの更新手続きを行ったばかりだった。有効期限内にビザが下りなければ、私は幽霊同然の存在であ



る。外国人の私がこの国で生き残れるのだろうか。いくらのもんきな私でもさすがに心配になってきた。

ある日のこと、あまり明るいとは言えない気持ちで私はスーパーマーケットに向かった。空はばつとしない薄鈍色で、冷たい雨が降っていた。昼過ぎの時間帯で、レジに並ぶ不機嫌そうな人々の列が店の奥まで続いていた。とそこへ、ひとりの老婦人がやってきて私の後ろに並び、こう言った。

「あら、まるで『ア・ラ・ク・ル・ル』の歌みたいね。ご存知かしら？」

私はちよつとびっくりして彼女を見た。小柄で上品な老婦人だった。彼女はひとの好きそうな明るい水色の瞳をしていた。シルバーグレイの短い髪の毛は、聞き分けのいい小犬のように耳の辺りでくるりと丸まり、耳には翡翠色のイヤリングをしている。温かそうなニットのワンピースを着て、手にはシクラメンの鉢を大事そうに抱えていた。フランスでは時々見知らぬひとが話しかけてくることがあり、びっくりしてしまう。でも目の前の老婦人が返事を待っているような様子だったので、私は五秒ほどの沈黙の後「知っています」と答えた。

「ア・ラ・ク・ル・ル (A la queue l'en l'en)」とは元々「列を成して歩く」という意味の成句表現なのだが、一九八七年にベズという歌手が同名の曲を発表し、一躍大ヒットとなつ

た。誕生日パーティーやクリスマスなどの機会に、フランス人はよくこの曲に合わせて踊ったそう。踊り方も決まっていって、人々は縦一列に並び、前の人の肩に手を乗せて進む。ちようど小さな子どもをする電車ごっこのように。老婦人がスーパーマーケットに並ぶ人々を見て「『ア・ラ・ク・ル・ル』の歌みたい」と評したのはそういうわけだった。

老婦人は鉢植えの他に何も買う物がないようだったので、私は番を譲った。そして「きれいな花ですね」と感想を述べた。

「ああ、これね。今日は友人の誕生日なの。それでこの鉢植えをプレゼントするのよ」

彼女は嬉しそうに言った。

実を言うと、私は結婚祝いにいただいた見事な蘭の鉢植えを枯らしてしまったばかりでだいぶ気落ちしていた。老婦人にそのことを打ち明けると、彼女は「蘭は難しい花ね」と言い、水のやり方や鉢のサイズなどについて細々としたアドバイスをくださった。



「また来年にも花が咲くわよ。信じて辛抱強く待たなくちや」

彼女はふわりと微笑んだ。そして会計を済ませると、軽く会釈をして去って行った。まるで神が遣わせた秘密のメッセンジャーのように。

外に出ると空はまだ灰色の雲で覆われていたが、雨は上がっていた。先ほどよりもだいぶ気分がよくなっていた。私は歩きながら、先ほど老婦人が言ったことについて考えていた。彼女も、きっと何株もの蘭が枯れ、また花を咲かせるのを見てきたのだろう。震えながら朝を待つような夜もあっただろう。明日になれば、何かきつといいことがあるだろうと信じて。

あと数時間すれば、アランが仕事から帰って来るだろう。そうしたらお気に入りのテレビシリーズを観ながら、ふたりでどっておきのお菓子を食べよう。それに先ほど出逢った老婦人のことも話そうと思いつながら、私はぬかるんだ道を歩いていった。



◆リヨン風信(五十四)◆

陽気な妖精

中川莉羅

十月の半ばに入り、やっと気温が二十度ほどに下がってきた。今年の秋は例年になく暑く、しばらく寝苦しい夜が続いていた。外に出れば、真夏のような陽射しの中で赤く色づいた蔦の葉が風に吹かれて踊っている。脳はこの情報を「秋」という概念に変換しきれずに戸惑う。スーパーマーケットでは、アイスクリーム売り場の隣で



クリスマスのシュートーレンが出番を待ち構えている。なんだかシュールな光景である。

この国に来てから、早いもので五年が過ぎた。日本を発つ前は「まずは学生ビザで渡航し、あわよくば就職口を見つけて就労ビザに切り替えよう」という漠然としたプランしか持っていなかった。そんなにうまく事が運ぶものなのかどうか、確信もなかった。ただ、当時のわたしを取り巻いていたあらゆる事柄が、フランスに向かって矢印を突き立てているように思われた。さあ急げ、今しかないよ、誰かに言われているような気がした。そうしてわたしは暗い渦の中に飛び込むような気持ちで、未知の世界に身を投じたのだった。

最初の二年間は語学学校に通ってフランス語を学びなおし、空いた時間で日本語を教えるという生活をしていた。忙しかったが、充実していた。そして二〇二〇年にコロナウィルスの波が訪れた。それは語学学校の最後の年で、ビザの更新をしなればいけない時期でもあった。結局、リヨン・カトリック大学への入学を決め、学生としてこの国に残ることを決意した。色々な理由があって残念ながら学業は断念したのだが、わたしは違やかたちの幸せを手にならなくなった。

二〇二三年九月十六日、アランとわたしは結婚した。証人であるアランの妹のアンヌ、彼女の娘たち（つまりアランの姪たち）のシャルロットとイリス、そしてタラール市代議士の立会いの元に、市役所でささやかな式が行われた。

フランスでは、結婚手続きは市役所の管轄である。日本人であるわたしは身分証明のために膨大な資料が必要で、戸籍謄本

やら何やらを日本の両親に頼んで郵送してもらわなければならなかった。それらの書類を在仏領事事務所に持ち込み、フランスで必要な書式に変換してもらい、さらにタラール市の市役所に提出するという流れである。幸い、市役所は自宅から徒歩五分ほどのところにある。担当の女性にすっかり顔を覚えられてしまうほど、足繫く通った。そうした書類手続きに要した時間は、トータルで半年間ほどだっただろうか。これらの準備期間に対して、式自体は非常にあっさりとしたもので、三十分もかからなかったと思う。代議士の男性が読み上げてくださる結婚条例に耳を傾け、指輪の交換をし、書類にサインをする。証人も式に必ず参加しなければならず、彼女たちも書類にサインをする。以上である。後日、日本の両親は「わたしたちも式に参加すればよかったね」と言ってくれたのだが、日本からわざわざ来てもらうには短すぎるくらいの簡素な式だったのである。

洋画でよく観るような、純白の衣装を身にまとった新郎新婦が教会の扉から登場するというタイプの結婚式も、





もちろん存在する。そのような式を行う場合でも、代議士と証人立ち合いの市役所での式は必須で、それが終わってから改めて教会へ移動するというパターンになるらしい。格式ばったことの苦手なアランとわたしはシンプルな形式がいいと思い、市役所での式のみ行ったのだった。

アヌたちは素晴らしい胡蝶蘭の鉢植えをプレゼントしてくれた。清楚な白い花びらがランプのようにいくつも連なって垂れ下がっている。それはまるでこれから歩く道を照らす目印のように、明るく輝いていた。

「これでやっとあなたと正式に家族になれて嬉しいわ」とアヌは言ってくれた。

燃えるような陽射しの下で、彼女の瞳はきらきらと輝いていた。実を言うと、アランの妹さんご家族とはかれこれ七年ほどのお付き合いになる。そうか、彼女はわたしの義妹ということになるのかと、当たり前のように思い当たった。農業を営み、四人の子どもを育て上げ、なおかつ女性としての美しさやたおやかさを失わない彼女は、年こそ下だけれどわたしよりもはるかにしっかりしていて、どちらかというと彼女の方が「お姉さん」のような感じだ。



それからわたしたちはアヌの家に向かい、彼女の家族と合流した。結婚式の証人となってくれた長女のシャルロットは、今年大学生になる。偶然にもわたしが通っていたリヨン・カトリック大学の文学部に進むという。栗色の髪の毛をした、小柄で可愛い少女である。次女のイリスは十五歳だが、すらりと背が高く、落ち着いた態度のためか十八歳くらいに見える。美しい金髪をなびかせ、ハスキーな声で話す。姉のシャルロットは陽気でよくしゃべるタイプだが、妹のイリスはどちらかというと無口だ。アランのくだらない冗談にも「さあ、知らない」と肩をすくめて笑っている。三男のルイは十一歳で、抜けるように色の白い、華奢な男の子である。いつからか眼鏡をかけるようになった。イラストを描くのが好きな大人しい子で、かしましい姉たちのおしゃべりには耳も貸さず、黙々と絵を描いている。それから末っ子のトム。いかにも賢そうな大きな栗色の瞳が印象的な男の子だ。まだ九歳だというのに、大人顔負けの受け答えをする。そしてアヌの夫であるヴィクトル。陽気で頼もしい、一家の大黒柱である。さらにアランと私という合計八名で隣町のレストランに車で向かった。

以前にも拙文で紹介させていただいた、アジア系ビュッフェスタイルのレストランである。育ち盛りの子どもさんのいるご家庭にとって、ビュッフェというのはすこぶるいいものだ。それにしても男の子たちの食べっぷりには度肝を抜かれた。三年ほど前だったか、彼らと一緒に鍋を共にしたことがあったのだが、その時、彼らはまだ小さくて、食べることもどそちのけで遊びの方に集中していた。しかし今回はまるで違った。あの華奢な躰のどこに収まるのだろうかと思うくらい、ルイもトムも底抜けの量を食べるのだ。後で計算したら、デザートも含めて各自五皿ほど平らげていたということが発覚した。「君たちの躰はいつたいたいどうなってるんだい？」とアランが訊くと、「だって：僕、みんなと同じように食べてるだけだよ」とトム。

それから少年は「ちょっとフルーツでも取って来よう」と言ってまたビュッフェコーナーの方に駆け出していった。

帰りの車の中では、はやりのアニメのテーマソングを全員で合唱し、とてもにぎやかだった。何せ四人も子どもがいると、必ず誰かが何かしらしゃべっていて、無言のひとときというも



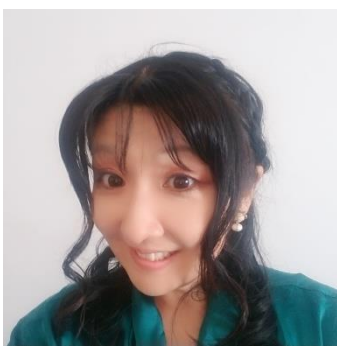
がないのだ。アランとわたしにとって、それはとても楽しく新鮮な時間だった。

自宅まで送ってもらい、バイバイ、また会おうねと言って、彼らと別れた。アパートの廊下の蛍光灯がひとときわ白く輝き、さきほどまでの余韻が熱のようにわたしたちの躰を取り巻いていた。

「楽しかったね。最高の一日だった」とアランが言った。

「そうね」とわたしも答えた。

結婚式というものは何か厳粛なものであるというイメージをわたしは抱いていたのだが、そのイメージはいい意味で壊された。明るくにぎやかな妖精たちがわたしたちの結婚を祝福し、また陽気に去っていったような感じだった。わたしたちのささやかな家の窓辺にも、妖精が棲んでいるといいなと思う。



志事

中川莉羅

いつのまにか九月である。世の中には夏の狂おしい暑さを愛するひともいるが、私はだんぜん秋を好む。きりつと冷えた風に誰かの残した香水の匂いが交じり、青い空からはばらばらと音符が降ってきそうだ。長い夏の夕べが終わり、夜の闇がほんのすこし濃くなってゆく。一年の中でもっとも好きな季節だ。

アランが会社に勤務しはじめてから四か月ほど過ぎた。リヨンまで電車で一時間、さらにメトロに乗り換えて三十分。帰って来ると彼はへとへとに疲れている。けれど仕事そのものは楽しいらしく、上司のソフィアや、同僚かつ従兄弟のグザビエともうまくやっていけているそうだ。おまけに福利厚生として支給される食券や、時折開催されるパーティーなども彼にとってはポイントが高いらしい。フランスの会社に勤めた経験のない私は驚くことばかりである。

暮らし向きがすこし楽になってきたので、私たちは日常の中にちよっぴり冒険を取り入れるようになった。『ザ・ポポット』という名のレストランも、そんな小さな冒険のうちの

ひとつだ。メイン通りにあるそのお店はピンクとグレーの配色が印象的で、以前から少し気になっていた。何と云っても、名前の響きが可愛らしい。ホームページによると、「ポポット」(popote)というのは元々軍隊の隠語で、「軍人の間で共有される食事」というような意味らしい。その言葉はやがてアルジェリア戦争の際にシャルル・ド・ゴールによって民衆にも広まっていったそうだ。現在でもこの言葉は「食事を作る(faire la popote)」という意味で使われている。

お店に着くと、店主の男性が出迎えてくれ、中庭へと案内された。そのごちんまりとした静かな庭には緑が気持ちよく生い茂り、二、三組のテーブル席が用意されていた。アランはざくろのジュース、私は冷たい抹茶を頼んだ。それから前菜としてサーモンマリネのさやいんげん添えがサーブされた。ベジタリアンメニューとして、サーモン抜きも可能という心遣いがある。お皿の中央に盛られたさやいんげんの横に、トマトとガーリックトースト、そしてなんとポップコーンが添えられている。大変興味深い組み合わせである。一見するとばらばらな個性を持つ食材たちが、繊細な味つけによって見事にまとめられている。

メインとして、アランはロースト鴨を、私はクスクスの温野菜添えを選んだ。最近暑いから食欲が落ちていたが、その一皿は何の抵抗もなくするりと喉を通った。ほくほくと煮えたにんじんやなすの自然な甘さ。それからクスクスはスープ粥のようになっていて、食べやすい。食後もだるさが残らず、むしろ躰がすっきりしてきた。「食べる」ということは、単に胃袋を満たすだけの行為ではない。こうして丁寧な心こめて作られた食事は、文字通りひとの心と躰をじんわりと癒してくれるのだ。プロが扱うと、にんじん一本、トマトひとつでさえも魔法のように美味しくなる。食材の切り方ひとつにも、愛情が感じられる。日頃いかに自分が雑に料理をしているかと思ひ、すこし反省した。

その翌日、私は所用のためリヨンに出かけた。日中に用事を済ませ、夕方仕事を終えたアランとグザビエと落ち合うことになった。朝九時頃の電車に乗り、十時頃リヨンに到着した。大通りをぶらぶら歩いていると、日が高くなってきた。天気予報では二十八度とのこと。大丈夫だろうと高を括っていたが、ベルクール広場を横切るころには灼熱の太陽にすっ



かり体力を奪われてしまっていた。フランスの夏は湿度が低くてからっとしていたが、ミイラになってしまいうようなほど陽射しが強い。私は近くのカフェに立ち寄ることにした。静かな店内でアイス珈琲を飲んでみると、ようやく人間らしい状態を取り戻してきた。

気を取り直してまた炎天下の広場へと戻る。あちこち迷った拳句洋服を購入し、続いて靴屋へと向かう。それはこぢんまりとした個人商店のようなお店で、見るからに高級そうな店構えだった。私は一瞬怖気づいたが、覚悟を決めて入った。

中に入ると、四方をぐるりと取り囲むように美しい靴が並べられていた。上品なローファー、ラメのきらめくピンヒール、秋物のグラニーブーツ。ぼうっとしてみると、店員の女性に近づいてきて「何かお探しですか？」と訊いてくださった。若くて綺麗な女性だった。黒い髪の毛を首の後ろできりと結び、スリットの入った黒いワンピースを着ている。白いスニーカーというのが少し意外だが、それがかえって黒を重く見せず彼女の若々しさを引き立てていた。



「このワンピースに似合う靴を探しているのですが」と言っ  
て、私は買ったばかりの洋服を見せた。それはターコイズ色  
のサテン地のワンピースだった。

彼女は洋服を見て何かを考えていたが、にっこり笑ってこ  
う言った。

「黒い靴をお勧めします。黒は何にでも合うし、どんなお洋  
服も引き立ててくれるんですよ」

それから彼女はハイヒールを二、三  
足出してきて私の前に並べてくれ  
た。わざわざかがみこんで丁寧な靴  
を見せてくださるので、私はいへ  
ん恐縮した。しかし彼女はあくまで  
プロフェッショナルに徹していて、  
次から次へと魔法のように靴を出し  
てきては、どうぞ遠慮なく試着して  
くださいと言う。結局私が選んだの  
は、ベーシックな黒のハイヒールだ  
った。かたちがシャープなので全体  
のバランスを綺麗に見せてくれる。  
ヒールの裏側にはさりげなく金色の  
ラインが入っている。細かなところ  
に配慮があるのだ。彼女にアドバイ  
スを求めてよかったと思った。



靴屋を後にし、旧市街へと向かう。ここに来ると必ずとい  
っていいほど立ち寄り石鹸の専門店があるのだが、今回もつ  
い足が向いてしまった。店内には色とりどりの石鹸が壁一面  
にぎっしりと陳列されている。ラベンダー、アップルシナモ  
ン、ココナッツ、さらにはなんとチョコレートの香りのも  
もある。私はラベンダーの小袋と石鹸を購入した。店員の女  
性は小柄でよく日に焼けており、きびきびと働く力強い印象  
の女性だ。彼女は私のことを覚えていてくれた。アランと私  
はこの店の大ファンなのだ伝えると、うれしそうに笑って  
くれた。そして「また来てくださ  
いね」と、笑顔で送り出してくだ  
さった。

買い物を終えて待ち合わせ場所  
に向かいながら、私は静かな充足  
感のようなものを感じていた。最  
近出逢った人々は、みな親切で感  
じよく、「このひとたちにお任せ  
してよかった」と思えるようなプ  
ロフェッショナルリズムをそれぞれ  
持ち合わせていた。もちろん、お  
金を支払ったのだからお客様とし  
て丁寧に接してもらるのは当然だ  
り前だ、という考え方はあるだろ  
う。しかしフランスではいつもそうとは限らないのだ。「ご家



庭でケンカでもされてきたのですか」と尋ねたくなくなるような  
仏頂面をした店員さんに出くわすことなどしよっちゅうであ  
る）。

以前、日本にいた頃の整体師さんが仕事の話をされる時、  
よく「志事」という漢字を使っていらしたのを思い出す。生  
まれ変わってもこの職業に就きたいと思えるほどの天職を指  
す言葉らしい。

もし、いつかここで仕事をするとしたら、「志事」となる  
ような働き方がしたいと私は思っ  
た。正直に言うと、何ができるか  
すらまだわからないのだけれど。  
そのようなことを考えながら、私  
は待ち合わせ場所へと急いだ。



◆リヨン風信（五十二）◆

ふたりの偉人

中川莉羅

八月のフランスと言えば、バカンスシーズンである。街には「一時休業中」のビラがあちこちの店に貼られている。白いひかりが降り注ぐ無人の街を歩いていると、存在しない架空の世界に迷い込んだような気分になる。

七月に悲しい知らせがあった。十一日にミラン・クンデラが、続いて十六日にはジェーン・バーキンが逝去した。二人はフランスをはじめ世界中に多大なる影響を与えた人たちである。著名な方々なので今さら説明の必要もないだろうが、僭越ながら簡単に紹介させていたたく。

ミラン・クンデラはチェコスロバキア生まれの作家である。一九六八年「プラハの春」で改革への支持を表明したことから、国籍を剥奪されフランスに亡命した。一九八一年にフランス市民権を取得して以来、精力的にフランス語での執筆活動に取り組んだ。冷戦下のチェコスロバキアを舞台とした恋愛小説「存在の耐えられない軽さ」は発売されるや否や世界的なベストセラーとなった。二〇一九年にはその功績が称えられ、チェコ国籍回復に至った。

ジェーン・バーキンはロンドン生まれの女優・歌手・モデルである。一九六八年に渡仏しセルジュ・ゲンズブールと出逢う。彼の全面的なバックアップにより彼女は爆発的な人気を得て、ファッションアイコンとして一世を風靡することになる。ちなみにフランスの老舗ブランドであるエルメスのバッグ「バーキン」は彼女の名前を冠したものである。活動家としても知られており、二〇一一年の東日本大震災の際には、来日し震災支援のチャリティコンサートを行った。

一見あまり関連性のなさそうな二人だが、彼らとともに、若いころの私に大きな影響を与えてくれた人たちである。さて、ここから先は少し思い出話にお付き合いいただきたい。

話は私が大学生だった頃に遡る。当時の私は将来の展望など何もなく、就職活動すらしていなかった。働かなければ生きていけないことはわかっていたが、自分に与えられた自由な時間を出来る限り引き延ばしていたかっただと思う。大学三年生になるとほとんどの単位を取り終えていたので、アルバイト以外の時間はぶらぶらしていた。ＣＤショップを覗いたり、古着屋に立ち寄りたり、古本屋めぐりをしたりといったようなことだ。



砂浜で貝殻を拾い集める子どものように、私は少しずつ自分の好きなものを心の中にストックしていった。眠れぬ夜に聴くサティの「ジムノペディ」。深夜テレビで放映されていたゴダールの「勝手にしやがれ」。ふと惹かれて買ったフランソワーズ・サガンの「悲しみよこんにちは」。そしてもちろん上記に挙げた「存在の耐えられない軽さ」。それらのものを宝箱の中にしまい込んでみたものの、それが何になるのかということについては考えていなかった。色とりどりの貝殻のようなピースを手にとって矯めつ眇めつ眺めるだけである。

ある日ふと、思い立ってひとり旅をしようと思った。近づいてくるモラトリアムの終焉をうすうすと感じていたせいかもしれない。とにかく今だ、という気がした。思い立ったが吉日ということで、行先はどこにしようかと頭をひねった。ふと「フランス」というキーワードが浮かび上がってきた。それは本当に偶然だったのだけれど、当時好きになった小説や音楽や絵画などは、何かしらフランスにかかわりのあるものばかりだったのだ。

十一月のある日、私は二泊三日の予定を組んでパリに旅立った。航空券やホテルの予約のみ旅行会社にお任せして、それ以外のことはフリープランという気ままな旅だった。今思えばかなり無謀だったと思う。フランス語なんてひとことも話せなかったし、案内してくれる知人がいたわけでもない。けれど幸いにして当時パリの治安は悪くなかったので、私のような外国人がひとりでもふらふらしていても危険な目に遭う

ことはなかった（今現在のパリはどうだかわからない）。ガイドブックを頼りにエッフェル塔やルーブル美術館を訪れ、疲れてサンドイッチをかじり、夜は思い切ってレストランで夕食を取った。終始ひとりだったが寂しいとは思わなかった。それよりも街の美しさに夢中になっていたのだ。

絢爛豪華なオペラ座、凱旋門を彩るひかりの渦、ポンヌフ橋から眺めるセーヌ川の流れ。映画の中でしか知らなかったこれらの景色の中に、今、自分がいる。たとえ短い旅だとしても、この瞬間、私はパリにいるのだ。夕方の風の中に、誰かの香水の匂いとコーヒートの香りがまじって漂ってくる。勝手な思い込みだけれど、フランスが両手を広げて抱きしめてくれたような気がした。私は本気でパリに恋をしたのだった。

そしてとうとうフランスを去る日がやってきた。冗談ではなく、悲しみのあまり魂がもぎとられるように感じた。せめてフランスらしい格好で去ろうと思って、大きなふわふわの帽子を被って空港に向かった。シャルルドゴール空港に着き飛行機に乗り





込もうとすると、係員の方が何か話しかけてきた。ほほのすべすべした、明らかに若そうなフランス人の青年である。彼はしきりに私の帽子を指さして何かを言っている。もしかすると機内で帽子を被ってはいけないという規則でもあるのかと思ひ、私は帽子をとった。すると彼はすこし困ったような顔をし、それから笑顔を作って親指をぐいっと突き立てて見せた。それが「いいね！」という意味なのだということはずがにわかった。私はちよつとほつとして、覚えてたのフランス語を口にした。「Merci. (ありがとう)」と。それは他愛のないことだったのだけれど、悲しみに暮れていた心を少し明るくしてくれた。きつとまたこの国に来ようと思った。

私は帰国すると「フランスに留学する！」と家族に宣言した。両親はきつとびっくりしただろうと思う。つい先日まで「何をしたいかわからない」と言っていたうさだして来た娘が、急にフランスかぶれになって帰ってきたのだから。ともかく私はフランス語学習に本腰を入れるようになった。「フランス」と名の付く物なら何にでも飛びつき、貪るように味わった。先述のジェーン・バーキンの音楽もその一環である。少女のような儂い声で囁かれる歌詞の意味を知りたくて、辞書と首っ引きで歌詞カードを眺めた。ちっぼけな虫が無我夢中でひかりを目指すように、私の軌跡はでたらめだった。けれどその混沌とした道を照らしてくれるひかりに名前があるのだと知ったのは、大きな喜びだった。私が目指すのはフランスなのだ。

あれから長い歳月が過ぎた。今、私はリヨン近郊の小さな街に住んでいる。フランスに来てよかったことのひとつは、私が憧れてやまない人々が生きていた軌跡に多少なりとも触れることが出来る点である。先に挙げたミラン・クンデラやジェーン・バーキンといった人物は、私にとっては伝説上の人物のように神々しく見えた。けれどフランスの人々にとってはもつと身近な存在だったようだ。生前の映像を探すと、彼らはインタビューに答えたり、ジョークを言ったり、ミュージックビデオの中で踊っていたりする。ああ、確かに彼らは生きていたのだと思う。そう、そして私も彼らと同じ国にいるのだ。フランスへの憧れに火を点けてくれたふたりの偉人に心から感謝を捧げると共に、ご冥福をお祈りしつつ筆をおく。

## 陽炎

中川莉羅

今年の六月は天候不順の日々が続いている。真夏のような暑さが続くと思えば、元気をなくした子どもみたいにしゅんと冷える日もある。時折、天窓から空を仰ぐと晴れのさなかに小雨が降っているのが見える。妙な天気だ。

六月一日、アランの再就職が決まり、私たちの生活は一変した。そもその発端は二年半前に遡る。彼はとある会社で契約社員として働いていた。ところが件のコロナ騒動の影響でクライアントが激減し、会社も人員削減せざるを得なかったのだらう、アランの契約が更新されることはなく、そのまま会社を去ることになった。それ以来失業手当と政府の援助を受けて生活していたのだが、この度前述の会社から人手不足のためぜひ手伝ってほしいとオファーを受け、再び働くことができるようになったのだ。ありがたいことである。幸い、その会社には従兄のグザビエも勤めており、上司も感じの良い方で、心地いい環境で働くことができているそうだ。私もほっと胸をなでおろしている。

五月のある日、私たちはリヨンに遊びに行くことにした。仕事が始まる前の最後のバカンスを楽しもうというわけだ。幸い、当日はやや肌寒いくらいの気温で夏バテの心配はなさそうだった。電車で揺られること一時間弱。私たちはあつというまにリヨンに着いた。

大学のあるキャンパス通りはまったく変わっておらず、アコーデオオン弾きのおじさんも相変わらず広場で同じような曲を演奏していた。大学を辞めてから二年ほど経ったが、その間に何かが変わってしまったわけではない、という当たり前の事実がなぜか私をほっとさせた。まるでその空間が、なつかしい絵のようにすっかりそのまま保存されているような気がしたのだ。しかし通りの店々を覗いて歩くと、やはり少しずつ変化している。日本でもおなじみのメゾンカイザーや、インテリア雑貨のお店、バブルテイーのカフェなど新しいお店が増えている。そして何より漫画専門店がそこら中にあるのはびっくりした。

ウインドーショッピングを楽しんだ後、アジア系のレストランへと向かう。ビュッフェ形式のレストランなので、寿司もサラダも焼肉も取り放題である。もちろんアイスクリームやケーキなどのデザートもある。

「結局、ここは韓国料理のお店なのかしら？」と私はキムチサラダを食べながら尋ねた。



「さあ。韓国も日本も中国も一緒くたになつてゐるみたいだね。お店の人たちも何の料理だかわかつていないんじゃないかな」とアランが肉を焼きながら答えた。

実際、この手のレストランはリヨンでよく見かける。「寿司レストラン」と謳うお店で、チーズやアボカドをばさんだ怪しげな巻き寿司とネムとギョウザが同時にメニューに載っていることもめずらしくない。それでもフランス人客たちは満足しているようで、ともかくオリエンタルな雰囲気を楽しめればいいというわけなのだろう。少なくともその日のレストランは盛況だった。

翳っていた陽射しが午後から急に強くなってきた。食後のけだるさもあり、近くのベルクール広場で休もうということになった。年金改革反対運動の際にはずいぶんとデモンストレーションが行われていたようだが、その日の広場にはそのような形跡は少しも見当たらなかった。歩き疲れて休むひとや学生らしきグループが、陽だまりのベンチにのみである。アランは少し眠ると言って、背負っていたリュックサックを枕にうとうとしはじめた。退屈になった私はそこらをぶらぶら散歩しに行った。



ベルクール広場のはじつこの方に、星の王子さまとサンテグジュペリが仲良く肩を並べた銅像がある。けれどそれは樹の影に隠れるようにひっそりと建っていて、よく気を付けてみないとわからない。もっと近くで見ようと近づいていくと、初老の男性に声をかけられた。



「お嬢さん、もう少し先にサンテグジュペリの生家がありますよ」とその男性は英語で言った。私が外国人だから気を遣って英語で話してくれたのか、それとも彼自身が英語圏の国から来た観光客なのかは判然としなかった。ともかく私はお礼を言っつてその場を離れた。実は以前、日本から来た友人を案内したことがあり、その場所は知っていたのだ。

ところが、自慢じゃないが極度の方向音痴の私は、しばらくリヨンにこない間に方向感覚をすっかり失ってしまった。ウロウロしていると、先ほどの男性に再び会った。脚が悪いのだろうか、彼はゆっくり、ゆっくりと歩き、私たちはなんとなく同じ方向に向かって歩き出すかたちになった。

「日本の方ですか？」とその男性は尋ねた。

「はい、そうです」と私。

すると彼はぼつと顔を輝かせ、「それはいい！実は私はこの夏日本に旅行する予定なんです」と言う。そして鞆からいそいとガイドブックを取り出した。

「すみませんが、『新幹線の予約を三名お願いします』ってなっていて言うんでしょう。書いてもらえませんか？」と、空白のペーじとペンを差し出した。

私は日本語の表現をローマ字で書きながら、簡単な説明をした。

「ありがとう」男性は心から嬉しそうな顔で言った。本当に日本が好きなのだろう。そして別れ際に

「その横断歩道を渡ってすぐのところですから。じゃ、いい一日を」と言いつて手を振ってくださいました。私も手を振り返した。



た。

さて、件のサンテグジュペリの生家は思ったよりも目立たない場所にある。ふつうの通りの、ふつうの建物である。おまけにその建物にはデンタルクリニックやら事務所やらが入っていて、『サンテグジュペリの生家』らしきところは一つも無い。しいて言えば、「サンテグジュペリ通り」のプレートが掲げているが、それだって気を付けていないと見過ごしてしまいそうだ。「いいんだよ、それで」と、作家が陽炎の中で笑っているような気がした。

昼寝を終えて元気を回復したアランと私は、そこからさらに歩いてリヨン旧市街地を目指した。まだリヨンに住んでいたころ、アランと私はよく長い、長い散歩をしたものだった。その日もまた同じ橋を渡り、変わらぬソーヌ河の水の色を見た。風がごとく吹き、橋が揺れる。太陽は私たちをいたぶるように照りつける。観光客たちが写真を撮っていて、ただでさえ人通りの多い道を塞いでいる。早く通り過ぎた方が賢明だとは思う。それなのにやはり私も立ち止まり、写真を撮ってしまう。ローマ帝国時代から脈々と流れているこの河は、瞬きする間に消えてしまうような代物ではないとわかっている。三千年前もそこにあり、今日も、明日も、私がこの世界から消え去った後にもきっと存在し続けるだろう。けれど私にとってのソーヌ河は、今、この瞬間だけのものだ。眩暈のするような時間の流れの中に、ちっぼけな塵のような私が存在している。そしてほんのわずかな時間、ソーヌ河と私は会遇する。その証拠のようなものを残したくて、私は写真を撮るのかもしれない。



私たちはなつかしい石畳の街を歩き、サン・ジャン聖堂を訪れ、オルガンの音色に耳を澄ませる。フ

ローズンヨーグルトを食べ、石鹸やらレモンジュースやらお土産を買って帰る。それだけのことが、きつと十年後には愛しい時間になっっているだろう。今日この日も、まばゆい時間の中に消えてゆく。けれど完全に消えてし

まう前に、「今」という時間をどこかに刻み

つけようとして私ほもがく。陽炎のような時を日記に封印することはできないとしても。



## ◆リヨン風信（五十）◆

### 祝 祭

中川莉羅

五月五日、世界保健機構（WHO）は新型コロナウイルスの感染症に関して「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」をついに解除した。これで名実ともに私たちはコロナウイルスの脅威から解放されたことになる。長い、長い闘いだっただ。罹患者の方々に深刻な後遺症などが出ないといいと願う。

五月のフランスは、やや肌寒い日々が続く。先日は雹が降った。天窓にばらばらと当たる雨の音がいつもより大きく、誰かが石粒でも投げているのかと思うほどだった。アランは窓を見上げ、「これは雹だね」と言った。寝室の窓を開けてみると、屋根瓦をたたく猛烈な雨音とともに、雪のかたまりのようなものが窓辺に吹き込んできた。直径5mmほどもある金平糖のような見た目だが、こんなものに打たれたら痛いだろうなと思う。私は、雹というものを多分フランスに来てからはじめて見た。それは寒さ厳しい雪国で見かけるものかと思っていたのだ。しかしアランに言わせると、この季節に雹が降るのはめずらしくもないそうで、こちらではよく見かける光景だそうだ。暑い

が苦手な私たちは、「このまま冷夏になるといいね」と話している。



ある日曜日のこと。めずらしくかなりと晴れた青空がとてもきれいだっただので、私は散歩に出かけた。フランスの日曜日といえば、街は静まり返っているのが普通である。キリスト教国家だからなのか、日曜日の営業は労働法違反に当たるそうで、この日はアラブ系らしき方が経営する小さなケバブ屋がひっそりと店を開けるくらいのものである。ところが、その日は街の様子がいつもと違っていた。遠くの方から楽隊の音らしきものが聞こえてくる。一瞬、夏の甲子園球場の応援ソングかと思っ

た。いやいや、そんなはずはない。ここはフランスだし、甲子園のシーズンですらない。ただ、トロンボーンの勢いのいい演奏やそれに伴って聞こえてくる人々の歓声が、日本の夏を彷彿とさせたのだ。毎年観るともなく観ていたテレビの実況中継や、エアコンから送られてくる弱めの冷房の風、母が用意してくれたそうめんの味などがぼんやりと蘇る。人間の脳というのは、妙な錯覚を起こすものだ。

音の聞こえる方に向かってみると、いつもはマルシェの開催されているホールに、何やら人だかりができています。どうやらブラスバンドが来ているようだ。メンバーは十人ほどだろう

か、みな揃いの赤いユニフォームを着て、一心に何かの曲を演奏している。そして彼らのすぐそばに小柄なフランス人の男性がいて、曲に合わせて踊っているのだ。その男性はブラスバンドのかなり近くででんぐり返しなどをするものだから、見ているこちらは演奏の邪魔になるのではないかとひやひやしたが、注意する人もいないので、どうやらそういうものらしい。アップテンポだった曲がスローバラードに変わると、今度はふたりのマダムが手を取り合って踊りだした。優雅にのびのびと、実に楽しそうに踊る彼女たちは、誰からどう思われるかなどちっとも気にしていない。ただ、音楽があるから踊るのよと言わんばかりである。「フランス人は冷たい」という印象を持たれがちだが、実際の彼らはお茶目で情熱的な人々なのではないかと思う（もちろん、個人差はあるだろうけれど）。

それにしても、これは一体何のフェスティバルなのだろう。後にアランの妹さんに伺ったところ、この日は『三のつく年に生まれた人々のお祝い』だそうである。今年は一〇二三年なので、同じように「三」のつく年に生まれた人々はすべてこのカテゴリーに当てはまることになる。例えば一九四三年、一九五三年、二〇〇三年、二〇一三年生まれ、というように。ここタラールにもブラスバンドなどが来て盛り上がっているが、妹さんの住むサン・ロマン・ド・ポペイという街でもかなり大規模なフェスティバルが翌週に開かれる予定とのことだった。彼女の末っ子の男の子は行列に参加する予定らしい。後日送ってくれた写真を見ると、華やかに飾り立てられた台車や、「三」の数字の入ったシャツを着て行進する少年少女たち、通りいっばいにあふれて口笛を鳴らす人々など、陽気なお祭りの様子



が伺えた。終盤にはキャンプファイヤーや花火まで行われたようだ。

「兄さんと莉羅も来ればよかったのに。ずいぶん盛り上がったのよ」と妹さんは言ってくださった。しかし彼女の住む街は少し離れていて、車を所有していない私たちにとっては気軽に訪ねていける距離ではなく、残念ながらまたの機会に、ということになった。

ところで、タラールの話に戻ろう。ブラスバンドを追って、教会前の広場に移動することにする。チューリップの赤や黄色が鮮やかな広場には特設テントが用意されており、飲物なども販売しているようだ。この静かな街のどこにこんなに住人がいるのだろうと思うほど、広場にはたくさんの人々がつめかけている。私が到着したところにはすでに演奏が始まっていた。そして「音楽のあるところ踊る

ひとあり」と言わんばかりに、また今度は別のマダム二人組が楽しそうに乱入していた。後に友人が教えてくれたのだが、この時演奏されていたのはピエール・バシュレという歌手の『レ・コロン』という曲だそう。北フランスの抗夫住宅街のことを歌ったこの哀愁漂う曲を、その場にいた人々はバンドに合わせて合唱していた。「演奏者」と「観客」という壁はそこに存在せず、文字通りみな一体となって空間を共有している。私は異邦人としての自分がそこに完全に溶けきれないのを感じながら、しかし、そのお祭り気分にはのかに陶醉していた。

また別の曲では、一転してかなりアップテンポな曲調となった。トランペットやシンバルの音がびしびし響き、胸を熱くするのは生まれてはじめてかもしれない。軽やかなステップを踏みながら別の女性が現れ、ひとしきり踊った後、また視界の端に消えていった。

ここで今日見かけた人々は、もちろんまったく見知らぬ人々であることをずっと昔から知っているような、なんだか声をかけたくなるような気にさせられた。目が合えばふと微笑んでしまいうさだ。

それは多分、今日この時にしか味わえない一瞬をわかちあえたからかもしれない。激しいリズムに乗って陽気に踊っていた人々も、明日になればきっと、どこぞのオフィスの受付嬢とか、銀行員などに戻って働くのかもしれない。そして街もいつもの顔を取り戻し、また静かな生活が始まるのだろう。けれど今はまだ音楽に身をゆだねていよう。すべての人々が仮面をかなぐり捨て、ただ喜びに身を任せるこの瞬間に、明日のことを考えるのは野暮だろう。わたしは軽く目を閉じ、まだざわめきの残る広場の風を肌を感じていた。





◆リヨン風信(四十九)◆

明日の歌

中川莉羅

今週の月曜日はイースターの祝日だった。イースターとは、イエスキリストの復活を祝うキリスト教由来の祭日のことである。この日には各家庭にうさぎがやってきて、卵のかたちをしたチョコレートを庭に隠すと言われており、小さなお子さんのいるご家庭ではチョコレート探しをするのだそうだ。大人同士なら、うさぎや鳥や卵のかたちをしたチョコレートを贈り合う。これらはすべて繁殖や豊穰を表すイースターのシンボルとされている。

この街でも、一か月ほど前からほうぼうの店でイースターの飾り付けが始まっている。パステルカラーのピンクや黄色の卵を抱く鶏、うさぎのぬいぐるみ、色とりどりの花で飾られた店々を覗いてまわるのは、なんとも楽しいものだ。

一方、年金改革をめぐる問題でフランス全土でストライキが行われている。退職年齢を六十二歳から六十四歳に引き上げよ





うとするこの法案は、フランス国民の激怒を伴って迎えられた。パリをはじめとする大都市では百二十万人がストライキに参加し、警察は催涙ガスを用いて制御するなど、日に日に過酷さが増している。政府は国民の反対意見にも関わらず法案を可決し、四月十四日には本格的に採用された。この動向に世界中のメディアが注目しており（もちろん賛否両論あるだろうが）、権力に屈しないフランス人の反骨精神を好意的に見る向きもあるようだ。《Be More French》（もつとフランス人のようになろう）と謳う人々さえいる。国民全員が一丸となって政府に立ち向かう様は、フランス革命を彷彿とさせる。

このような激動の情勢ではあるが、幸いにしてここは小さな田舎町なので、ストライキなど起こりようもない。イースター休暇のためだろうか、ほがらかな笑い声をあげて街を行き交う若者たちとすれ違う。スーパーマーケットにはいつもより家族連れが目立つように思う。平和なものである。

アランと私は、毎週土曜日にマルシェに行き、野菜を買うことにしている。スーパーマーケットで買うよりも、手ごろな値段で新鮮な野菜が手に入るからだ。マルシェはメイン通りから少し離れた街の一角で開かれ、いつも地元の人々で賑わっている。会場に足を踏み入れると、「苺一箱七ユーロ！」とか「三皿で六ユーロ！」などという威勢のいい八百屋のおじさんの掛け声が聞こえてくる。周囲を見渡せば、すでに出回りはじめた苺のケースが山積みになっており、ミントの葉のさわやかな香りも漂ってくる。

このマルシェの雰囲気は、いかにもフランスの地域文化に密着している感じがして好きなのだが、いざ自分で買い物をするとなると気おくれしてしまう。スーパーマーケットのようにきちんと列に並んで順番を待つ方式ではなく、あちこちからお客さんが詰め寄せ、「私はなすび一皿」だの、「こっちはトマトときのこ二皿ずつね！」などみんな口々に叫ぶからだ。それを八百屋のおじさんが一人で取り仕切っているのだから大変である。私のような外国人は戸惑うばかりだ。それに比べると、さすがアランは生粋のフランス人というのか、心得たものである。トレーに乗せられた野菜を吟味し、手際よくリュックサックに移し替える。「大将！そのトレー、三皿ね！」と言ってサッと代金を手渡す。八百屋のおじさんも阿吽の呼吸で素早くおつりを返してくれる。この感じはやはりこの土地に生まれ育った人でないと真似できないと思う。

料理が好きなアランは、インターネットで色々なレシピを検索しては新しいドレッシングや調理法を試している。ある土曜日の午後、私は次のレッスンの準備をしていた。パソコンの前に座りつきりて、申し訳ないと思いつつもアランに料理を任せていたのだった。一時間ほど経ったころ、「女王様のお食事でございます」と言いながら、アランが料理を運んできてくれた。一皿目はトマトとアボカド、玉ねぎやスイートコーンがふんだんに入ったサラダで、ポーチドエッグが添えられている。



さらに別の皿にはチコリとロックフォールチーズとりんごのサラダが鮮やかに盛られ、ベークドポテトもついている。一口食べると玉ねぎのさわやかな辛さが鼻に抜け、オリーブオイルの風味と新鮮な野菜の香りが口の中に広がる。ポーチドエッグにナイフを入れると黄身がとろりと溶けだす。まるで一流レストランのメニューのようである。

「どうですか、女王様」とアラン。

「すごく美味しい。どうもありがとう。忙しかったから、料理を手伝えなくてごめんね」と私。

「まったく、君はいつまでたっても謝るくせが抜けないんだね。ここはフランスだよ。そんなこと気にしなくていいから、さあ食べて」

そして私はふたたび食事に戻る。春のひかりがたっぷり差し込む部屋で、甘やかされた子どものように。

そのようなある日、所用でリヨンに行くことになった。今回は電車に乗っての一人旅である。春休みのためだろうか、朝九時の電車はすでに満員で、座る場所を見つけるのに苦労した。四十分ほどでリヨン・パールデュール駅に到着した。駅は学生らしき旅行者や外国人の家族連れであふれかえっている。しばらく田舎町に住んでいるので、人の多さに圧倒される。つい三年ほど前までこの街に住んでいたというのに。気を取り直して目的地を目指す。所用を済ますのに一時間もかからなかったの、すぐそばのテット・ドール公園 (Le parc de la Tête d'Or) に足を伸ばすことにした。

その公園は昔住んでいたアパートから歩いて十分ほどのところにある。小さな動物園や薔薇園のあるその公園は私のお気に入りの場所で、夏休みには毎日のように散歩しに行ったものだ。さんとさんと降り注ぐひかりの中、パンジーで彩られた庭園を歩く。小鳥の声が幻のように空から降ってくる。まるでこの世の楽園のようだと思う。やはりここにも家族連れが目立つ。イタリア語やスペイン語らしき言葉もちらほら聞こえてくる。人波につられ、足が自然と動物園の方へ向かう。

貴婦人のようなしとやかさでしらずと歩くきりんたち。印象派の絵画めいたフラミンゴたち。どことなくユーモラスな顔立ちの、大きな嘴のペリカン。ミニチュアの人間のようなすばしこいサル。それらの動物たちをのんびりと見ながら回る。それから、子ども向けのメリーゴーランド。緑色のミニ・トレインが園内をゆっくりと巡回する。

歩き疲れた私は湖畔近くのベンチに腰を落ち着けた。何年か前の自分も、こうして同じようにここに座っていた。あの頃はビザの問題で頭を抱えていて、文字通り明日がどうなるかまったく見当もつかなかった。あの頃の自分が影絵のようにそこに座っているのが見える。おぼろげな春のひかりのせいだろうか、私には





現実と幻の距離感がうまく掴めなかった。あの頃の私が尋ねる。今、幸せかと。幸せだと私は答える。呪いも運命も越えて私はここに残るだろう。ベンチの背もたれに身をゆだね、私は空を見た。糸杉の枝で縁どられた空からひかりがこぼれ落ちる。もう少し、あともう少しだけここにしよう。私は目をつぶり、風の音を聞いていた。風はまだ知らない明日の歌を歌っていた。

◆リヨン風信(四十八)◆

ありのまままで

中川莉羅

如月の陽射しは少しずつ私たちを春へと導いてくれる。一月は曇りがちで時には雪さえ降ったが、最近は晴れの日が続いている。ちいさな樹の芽が耳かざりのように揺れている。教会の広場にはいつのまにかパンジーの花が咲いている。変化というのは「そっぴいえば」というくらいさりのさりげなさで訪れるものなのかもしれない。

クリスマスから一月六日の公現祭、二月二日のろうそく祝別の日、二月十四日のバレンタインデー、二十一日の謝肉の火曜日、そして四月九日のイースターと、フランスにはキリスト教由来の祝祭日がある。しかもそれぞれの日に決められた習慣や食べるべきものなどがあり、すべてを忠実に守って

いたら胃袋がもたないのではないかと思う。店先では早くもイースターのためのチョコレートが売られている。冬のドレスを脱ぐのを忘れてしまった少女が、眠りから覚めてピンクのドレスを身にまとうように、街は駆け足で春に向かおうとしている。むせかえるような花の香りに包まれるのは、きっとまだまだ先のことだろうに。

空気がまだつんと尖っている早春のある日、甥っ子は引越越しに伴って新しい幼稚園に通い始めた。行きたくないといって泣くこともあれば、機嫌よく登園する日もあるらしく、彼の機嫌は春の天気のように気まぐれだ。それでも、元々明るい性格の彼は人見知りをすることがないらしく、どんな子ともすぐに打ち解けて仲良くなるそうだ。「みんな、ぼくの家に遊びに来ていいよ」などと発言をすることもあるらしい。その他にも、街に出かけると見知らぬ大人たちや外国人の方にも積極的にあいさつするとのことだ。社交性というのは生まれ持ったものなのだなど感心する。人見知りの私が何十年かかっても身に着けられないであろう能力を、甥っ子は小さいながらすでに獲得しているのだ。

昨年の冬だったと思うが、甥の四歳の誕生日祝いに家族と一緒にスカイプで通話した。彼が生まれたばかりのころに帰国して会いに行ったことがあるが、それ以来コロナ禍のためにチャンス逃してしまい今に



至っているので、甥っ子の顔を見て話すのは本当に久しぶりだった。彼は私の顔を覚えてくれていたらしく、当日は大はしゃぎで通話に応じてくれた。それにしても聞きしに勝る雄姿である。いっときもじつとしていない。お菓子のきをこを一口食べて「毒だ！助けて！」と家族に助けを求め。指名された家族のメンバーは何やら魔法の呪文を唱え、小さな甥っ子の軀を抱きかかえる。すると彼はまた生き返り、きのこをまた食べ：という遊びを繰り返している。あんなに小さな軀のどこにそんなエネルギーがあるのだろうかと思う。そして、『アナと雪の女王』のテーマソングを歌詞まで暗記しているらしく、身振り手振りを交えながら歌ってくれた。姉曰く、先日カラオケに行った際にすべて覚えてしまったらしい。大したものである。

「ありのままの 姿見せるのよ  
ありのままの 自分になるの  
何も怖くない 風よ吹け  
少しも寒くないわ」



真っ黒な髪の毛を揺らし、小さな手足をばたばたさせながら、甥っ子は一生懸命に歌ってくれた。将来はアイドル歌手になれるのではないかと、叔母馬鹿の私としては思ってしまった。

夜も更けてきたし、そろそろ通話を終了しようかというとき「ダメ！」と甥っ子が言うので、彼が遊びに熱中している間にそっとスカイプを切った。

後日、両親から小包が届いた。衣服や日本の調味料、お餅に蕎麦、お菓子など、こちらではなかなか手に入らない貴重な品ばかりで、ありがたくいただいた。日本食が大好きなアランは焼肉のたれや胡麻ドレッシングなどに大喜びしていた。

「ありがたいなあ。お返しに何か送らなくちゃね。君の甥っ子くんにも」とアラン。甥っ子の写真や動画を見せるとアランは喜ぶ。おそらく自分自身の子どものころを思い出すのかもしれない。

「まだ会ったことがないけど、ぼくは彼のこと、好きだな。面白いし、かわいいし、賢そうな顔をしているし」とアランは言う。そして彼はいそいそと食卓に向かい、白米にたっぷりふりかけをのせて食べ始めた。日本に十年住んでいたアランのたつての要望で、このアパートには炊飯器があるのだ。

彼があまりにもおいしそうに日本食を食べるので、不思議なもの、私もフランスにいる時の方がよくお米を食べるように



なった。海外に出ると日本の良さがわかるようになると言われるが、まさしくその通りだと思う。

「フランス人になりたい」と、うんと若い時に無茶な夢を抱いていたことがある。その当時の私は、フランス語の学習はもちろん、ファッションや音楽や人生哲学に至るまで、頭のとっぺんから爪先までフランスにかぶれていた。その考えは後になって少しずつ是正されていったのだが、そのターニングポイントして、ある人から言っていたただいた言葉が胸に残っている。

「今の躰は日本で育って大きくなったのだから、躰の細胞のひとつひとつは日本の食べ物から出ている。きつと海外に長く住んでいると知らずにくたびれてくるだろうから、時にはゆっくり躰を休めてください」と。

その時まで、私は自分が日本人であるということをあまり意識していなかった。いや、できれば日本人であることを忘れていたとさえ思っていた。常にフランス語で話し、フランス語で考え、フランス語で夢を見るくらいにならなければここに住む意味がないとさえ思っていた。

けれど、自分が日本人であるという事実は変わらない。食事だけではなく、おじきとか、相槌を打つ時など、あらゆる動作



はすべて日本で学んだもので、それはフランス語を話す時にもひよっこり顔を出す。そして言葉もそうだ。日本語を教える仕事をしているとき、言語というものはそれ自体である種の思想を伴っていることに気づかされる。今の私をかたちづくるすべての基礎は日本で出来上がったもので、その核はきつと一生変わらないだろう。そしてそれでいいのだと、最近やっと思えるようになった。

「ありのまま」の自分を知るといえるのは、ほんとうは恐ろしい、怖い、見たくないものを含んでいるかもしれない。自分の力を封印しようと誓った雪の女王エルサのように、何か自分にとって都合の悪いものが隠されているのかもしれない。それでも、勇気を出してその「ありのまま」を抱きしめなければいけない。



小さな甥っ子は、きつとまだ何かを隠すことも、自分自身に嘘をつくことも知らないのだろう。けれど彼のありのままの姿は、大人たちの心を強く打つ。まっしろなクリスマス朝のひかりのように。どうか彼が純真な心を持ったまま、大人になつてくれますように。そして私自身も、そして私自身も、「ありのまま」の自分を思い出せるようにと、願う。



◆リヨン風信(四十七)◆

孔雀のいる古民家ホテル

中川莉羅

フランスでは、クリスマスから一月六日の公現祭までの期間は「ひとつづきのお祝いの時間」と考えられているように思う。例えばこれを書いているのは一月十八日なのだが、クリスマスツリーを出しっぱなしのお店なんてめずらしくはない。パーティーから帰ってきたシンデレラが、ガラスの靴を脱ぐのを忘れてしまったように。

先日、散歩している時にとある古民家ホテルの前を通り過ぎた。この連載でも紹介させていただいた、孔雀のレオン氏がいる場所である。するとアラランがこんなことを言った。

「『Youtubeチャンネルのために撮影させてください』と頼んでみたら？こんなに素敵なホテルなんだし」  
確かに、それはいい考えだなと私も思った。けれどその時はその話は宙ぶらりんのままで終わってしまった。

ところが、である。昨年末のある日、ブルゴーニュ地方から友人が遊びに来てくれた。ここでは仮に「セルジュ」と呼ぶことにする。彼はリヨンにいる友人に会いに来たので、タラールにも寄ってけると言う。

「わざわざ遠方から来させてしまったってごめんね。私たちのアパートに泊めてあげられたらよかったんだけど」と言うと、「いやいや、ネットで見つけたホテルを予約したから大丈夫だよ」と彼は言う。

「それにね、そのホテル、すごく素敵なんだ。中庭に彫像があって、ホールにはピアノまであるんだ」  
もしやと思い、ホテルの名前を訊いてみると、なんとアラランと私が話していたあのホテルであった。

小学校で音楽の教師をしているセルジュは、彼自身も作曲やピアノの演奏をしているらしく、日本でコンサートを行ったこともあるそうだ。彼の音楽性に感銘を受けたのも、今回会うことになった理由の一つであった。セルジュはこれまでのアルバムをすべてMP3ファイルにして渡してくれたばかりではなく、出身地の特産品を集めた素敵なプレゼントまで持ってきてくれた。なんだか恐縮である。私は紅茶とマカロンをお礼にプレゼントした。

翌朝、街を案内するためにホテルまでセルジュを迎えに行くと、経営者のご夫婦が出迎えてくださった。ご主人はアインシュタインを思わせる、もしやもしやの銀髪と知的なまなざしが印象的な紳士である。奥様は黒い髪の毛をシニヨンに結び、感じのいい微笑をたたえている。まるで映画のセットの



ような美しいホールに通してくださり、部外者の私にまでコーヒーをご馳走してくださった。ちょうど朝食時だったので、私たちのほかに赤ちゃん連れのご夫婦が同席していた。

オーナーはそこでホテルの歴史について語り始めた。その館は十九世紀に絹織物の経営者によって建てられたそうだ。その後時代とともに四世代の家族に引き継がれ、その中にはレジスタンス運動の活動家アルベール・ジロンも含まれていた。第二次世界大戦中、アルベール・ジロンはホテルの中庭の扉を通って敵軍から逃げおおせたという逸話もあるらしい。そうした重厚な歴史が居心地のいいこの館のあちらこちらに織り込まれているなんて、なんだか信じられなかった。

ひとしきりオーナーのお話を伺った後、恐る恐る、ホテルの撮影をしていいかとお願いしたところ、快く引き受けてくださった。こうして私は、かなり最短で願いを叶えることが出来たのだった。セルジュがこの街まで来てくれないければ、そしてあのホテルを選んでいなければ、たぶんここまですんなりことは運ばなかっただろうという気がする。友人との出逢いが素敵な時間を提供してくれ、さらにその出逢いが別の扉を開いてくれるといった、とても不思議な偶然に恵まれたのだった。

そしていよいよ撮影当日になった。私は薔薇の花束を買って持っていった。当日は小雨が降っており、空はくすんだ灰色だっ



たが、暖かいサロンに通されると撮影への心配が吹き飛んでしまった。

「じゃあ、後はご自由にどうぞ。私はサロンにおりますので」とオーナーは言い、私は早速撮影準備に取り掛かった。

淡い水色で統一されたホールにはセルジュの言った通りピアノが置いてあった。ステンドグラスには孔雀のモチーフが施されている。中庭に出てみると、いきなりにゆつと孔雀がいるものだから驚く。長く美しいエメラルド色の羽根を身にまとい、悠々と歩いているさまはまさに「鳥の王」といった貫禄がある。よく見ると一番大きく立派な雄の他に、もう一羽すこし小柄な雄と、さらに雌が一羽、合計三羽の孔雀がいる。オーナーご夫婦は、孔雀の名前は『マルセル』だと紹介してくださった。てっきり『レオン』という名前かと思っていたのだが、それは街の住民がつけたあだ名なのだろうか。それとも、『マルセル』が大きい方で、『レオン』は小柄な方の孔雀なのだろうか。なんだかよくわからない。真相は結局聞けずじまいだった。





孔雀の後を追ひ、中庭に通じる階段を降りてさらに奥へ進むことにする。ギリシャの神々の彫像が設置されたその庭は、古代ローマ帝国の円形劇場を思わせるような造りである。シェイクスピアの『真夏の夜の夢』が上演されたらきつと素晴らしいだろうと思う。小学校が近くにあるのか、子どもたちの笑い声が聞こえてくる。いや、もしかしらたらそれはいたずらな妖精



の声なのかもしれない。外部から隔てられたこの館では、雲の流れでさえ五秒くらい止まっているのではないかと思われた。

客室は五室あり、それぞれにテーマが設定されている。例えば、セルジュが泊まっていたのは中庭に面した部屋で『いたずらな妖精の部屋』と題されている。石壁や白地に青い花の描かれたタイルのせいか、どこかギリシャあたりの古い街に迷い込んだような錯覚を抱かせる。浴室には女神像が設置されている。その隣の部屋は『オレンジ園の部屋』と名前がついており、淡い水色の壁に白い鳥が描かれている。まさかと思ったが、やはりここの浴室にも二体の女神像が待ち構えているのであった。階段を上がると、今度は『おばあさんの部屋と狼』と題された部屋に辿り着く。花柄のソファやどっしりとした上質な書き物机などは、どこかなつかしきを感じさせる。さらに階段を上ると今度は『おどけた占星学者の部屋』へ。その名の通り、壁中に星がちりばめられ、天井では太陽が優しく微笑んでいる。最後の部屋は『アリスの塔の部屋』である。上品な桃色の壁紙に水色のベッドカバー、そして小ぶりの書き物机が設えられており、少女らしい可愛らしい雰囲気になっている。おまけに窓からは街の眺めが一望できるようにになっている。どの部屋も居心地よくしつらえており、細部に至るまで美しい装飾がなされている。この館をホテルに改築するにあたり、オーナー自らがデザインや装飾に携わったそうだが、それも頷ける。

撮影時間は思ったよりも短く、一時間ほどで終了した。しかし私は半世紀くらいそこにいたような気がした。帰り際、オーナーにお礼と別れを告げると、可愛らしい仔犬が出迎えてくれた。

見慣れた道の裏側を通っただけで、こんなにも美しい景色が見られるなんて、なんだか不思議な気分だった。私がこの街に來てからおよそ二年過ぎ、何でも知っているような気になっていた。けれどその実、まだまだ知らないことはたくさんあるのだった。ほんのすこしの勇氣と幸運があれば、なんでもできそうな気がしてきた。私は館を後にし、いつもの坂道を下っていた。まだほんのりと明るい空を背にして。

## 流れ星のかけら

中川莉羅

時が駆け足で過ぎてゆく。近頃さらに日の暮れるのが早くなつたようだ。十月三十日、夏時間から冬時間に切り替わり、本との時差が八時間になった。夏の長い夕べの光がいつまでも街を照らしていたころは、やがて秋が来るなんて冗談のように感じられたけれど、やはり季節はめぐってくるのだった。

ここではハロウィーンを大々的に祝わないけれど、十一月一日に万聖節(All Saints)というものがある。これはカトリックの祝日で、十一月二日に殉死した聖人の記念日の前日にあたり、死者のために祈る日である。そのため、学生たちは十月の後半から十一月の第一週まで二週間ほどの秋休みがもらえる。おまけに十一月十一日は第一次戦争休戦記念日(Armistice)のため、これもまた祝日である。

大学に通っていたころは、そうした記念日などの前日には誰かが必ず教えてくれたけれど、今はそういうわけにもいかない。世間から離れてひっそりと暮らしているアランも私も、時間や曜日の感覚をほとんど失っている。街に出てどの店も閉まっているのを見てはじめて、ああ、そういえば祝日かと気づく

有様である。どんぐりがばらばらと手品ののように落ちてくるのや、樹々の葉が赤や黄色に染まるのを見て、季節の移り変わりを知る。カレンダーという概念が存在しなかったころ、人々はきっとこんな風に過ごしていたのだろう。

リヨンからタラールに越してきたのは、二〇二〇年の十月末のことだった。早いもので、あれからもう二年も過ぎたことになる。教会やバス停、スーパーマーケットなどの道中で迷うことはさすがにないけれど、いつまで経っても私は異邦人のままだと感じる。小さな田舎町なので、自分以外にほとんどアジア人を見かけないというせいもあるだろう。けれど逆に言えば、いつまでも旅行者のまままでいられるということでもある。

最近街を歩くときに、携帯電話のカメラで街の風景を撮影するようになった。正直に言ってみるとパリのような大きな街ではないので、歴史的建築物がごろごろしているわけでもないし、観光客向けのきらびやかなレストランやブティックが立ち並んでいるわけでもない。灰色の空の下、いつもの場所に、いつもの店たちがむつつりと佇んでいる。それでも、





毎日必ずどこかに、何か目を引くもの、新鮮で美しいものがある。淡い桃色に暮れなずむ空の色。教会の上にはぽっかりと浮かぶ満月。そわそわとクリスマス準備をはじめ菓子店。そういったものを撮影すること

は、私にとって宝探しのようなものだな、と思うようになって。夜空に散らばった星くずを集めてネックレスにしよう、などと小さいころに夢想したことがあるけれど、大人になった今も、その発想は変わらぬ。日々のあちこちにちりばめられた小さな美しい星を拾い集めて、なんとかかんとか生きています。

私は自分の意志でこの国に来ることを選び、色々ありながらも基本的には楽しく暮らしているのだが、ともすると見慣れた風景が灰色に映る日もある。外に出れば空は鼠色で、小雨が降



りはじめめる。鳥がすごい勢いで単に帰ってゆく。憂鬱な顔をした双子のように日々がつつらと続き、時間の檻の中に閉じ込められてしまったように感じる日もある。そんな日は花とお菓子を買い

て早めに帰ろう。大人になってよかったことのひとつは、そういう風に幸せのタネを自分の力で作ってしまえることだと思う。

馴染みの菓子店に寄り、小さな可愛らしいケーキをたくさん買った。キャンドルを灯して部屋を温め、アランと私のお気に入りのテレビシリーズを観る。『スターゲイトSG1』というSFアクションストーリーだ。ちょっと古い海外ドラマだが、これが面白くてやめられない。

舞台は一九二八年のエジプトに遡る。エジプト遺跡から謎の文字が描かれた巨大な石輪が発見され、コロラド州のクリークマウンテンにあるアメリカ空軍施設に保管された。考古学者ダニエル・ジャクソンにより、ある日その謎が解かれた。その輪



はどこか別の星にあるもう一つの輪と空間を超えて繋ぐ物体だったのだ。アメリカ空軍はその輪を「スターゲイト」と名付け、ゲートの先を探索するための秘密部隊SG1を編成した。ジャック・オニール大佐、ダニエル・ジャクソン博士、サマンサ・カーター大尉そして異星人のテイルクの四人から成る部隊は、スターゲイトを通して他の惑星に住む人々との交流を広げつつ、宇宙の支配を狙う異星人との戦いを繰り広げる…というストーリーである。「私たちはこうしてぬくぬくと暖かい部屋でドラマを観ていられるからいい

けれど、実際に宇宙を旅することになったら大変だろうね」と私。

するとアランは真顔でこう言った。

「ある意味では僕たちだって宇宙を旅しているんだよ。地球はすごい速さで回転しているのだから、止まっているように見えるこの部屋も、実は目まぐるしいスピードで銀河系の中を動き続けているんだ。」

「ちよつとよくわからないんだけど…：どうということ？」と私。

「ほら、飛行機に乗っている時のことを考えてごらん。離着陸時はおもかくとして、飛行中の機内は止まっているように感じられるだろう？でも実際には時速九〇〇kmだとか、それくらいの速さで進んでいる。ただ僕らの目にはそれが見えないし、体感としても感じられない。それだけのことさ。」

「つまり、地球も同じことで、止まっているように感じられるけど、本当は動いているということね？」

「その通り。今、テレビシリーズを観ているこの瞬間もね。」  
天文学の教授のようにアランは言い、私たちはまたドラマの続きに戻った。



変わらないことなんて何もない。当たり前の日々が奇跡のように過ぎてゆく。日々の中の嫌なこともいいことも、流れ星のようにきらめきながらあつという間に消えてしまふ。その端っこをほんの少しでも掴めたらいいなと思う。その流れ星のかげらを拾い集めて、いつか大きなネックレスを作ろう。

